# 最終報告書

## 1.　シンガポールの Regional Language Center(RELC)における活動

① Dr. Alvin Pang へのインタビュー

RELC の所長であられる Dr. Alvin Pang と交流していくなかで以下のようなことが明らかになった。

SEAMEO

シンガポールに行く前には SEAMEO Regional Language Centre (RELC)に関しては東南アジアの公的な組織であるということは漠然とわかっていたが、Dr. Alvin Pang より資料をいただきながら詳しい説明を受け以下のようなことが明らかになった。

東南アジア教育大臣機構（SEAMEO：シーミオ）は、教育、科学及び文化を通じ、東南アジア諸国間の協力を促進することを目的とし、1965 年に発足（事務局はバンコク）し、加盟国は、ASEAN 諸国及び東ティモールの 11 か国で、準加盟国は、オーストラリア、フランス、カナダ、ドイツ、オランダ、ニュージーランド、スペインおよびイギリスの８か国である。なお、日本は理事会にオブザーバーとして出席しており、また筑波大学が数学を中心とした様々なイベントに継続的に参加しているという。域内に、教育研究分野、医学教育分野、農学、教育分野などの 21 の地域センターがあり、主に、教員研修や教材開発等を行っている。

SEAMEO は加盟各国からの拠出金によって運営されているが、イベントごとに多くの政府機関・団体・企業などから寄附を得て実施している。実質、日本からのサポートは他国よりも多く、例えば SEAMEO 加盟国内の小・中・高等学校の持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）に関する優秀な事例を 「SEAMEO-JAPAN ESD AWARD」として表彰している。優秀校には、日本訪問の機会を提供し、日本のユネスコスクールとの交流を深めることを行っているという。その他、SEAMEO Regional Centre for Tropical Biology（熱帯生物地域センター）はインドネシアに設置されており、森林、 害虫や水生生物学にフォーカスして活動し、熱帯生態系の持続的な発展のために、SEAMEO 加盟国における優先順位付けや分析、地域の重要な生物学的な問題などを取り扱っている。SEAMEO Regional Centre for Lifelong Learning（長寿学習地域センター）はベトナムに設立され、 教育政策の発展の基礎として生涯学習に関する研究・研修を専門とし、生涯学習を促進する上でアジアとヨーロッパの間のリンクを強化するための役割を行っている。また、SEAMEO Regional Centre for History and Tradition　（歴史と文化地域センター）は ミャンマーに拠点があり、研究、人材育成、教育、ネットワーキングを通じて SEAMEO 加盟国間の歴史と伝統の研究における協力を推進しているという。

Regional Language Centre (RELC)

その中で今回訪問した Regional Language Centre (RELC)の設立は 1968 年でシンガポールに拠点があり、東南アジアの英語教育を統括するセンターであり、言語の専門家や教育者のスキルをアップグレードするための専門知識、訓練施設や研修プログラムを通じて、言語教育を行っている。RELC はシンガポールの中心地オーチャードから歩いて 20 分程度のところにある。RELC の建物で、ここはホテルも付随しており、研修で来た教員・学生が泊まれるようになっている。

Regional Language Centre (RELC)の外観

シンガポールに拠点があるのは RELC のみであるという。東南アジアの中でシンガポールが中心的な存在だと勝手に思いこんでいたので、SEAMEO の拠点がバンコクで、その他の 20 の地域センターがインドネシアやタイやマレーシアに数か所ずつ設置されているのを聞いてかなり意外であった。SEAMEO のことなどもはじめて詳しく知り、東南アジアに対する知識の足りなさを今回痛感させられた。

RELC の所長である Dr. Alvin Pang の研究室において

RELC は大きくわけて２つの部門からなり、そのうちの１つは Language Teacher Education で、３週間の特別資格のコースから Master course を提供している。大学の教員や社会や科学などの専門家がこのコースを受けており、どのコースも加盟国各国１名（11 か国）が奨学金をもらって、派遣されているという。その他、授業料を支払って参加している人も若干いるということである。実際にこれらのコースをいくつか見学させていただいたが、そのうちの１つは短期のコースで英語教員を対象にしたコースであった。カンボジア・ミャンマー・フィリピン・インドネシアなどからの中学・高校・大学の英語教員が参加していた。彼ら一人一人に自国の英語教育や CLIL についてインタビューを行ったが、残念なことに、インドネシア以外は CLIL を行っていないということで、インドネシアの教員に個別に詳しく話を聞くことにした。この時のメンバーとは研究以外にもその後いろいろ話をし、メールアドレスなども交換することができ、東南アジアにおける人的ネットワークが築き上げることができたと思われる。

以下はそのときのメンバーの写真である。

今回研究対象である Content and Language Integrated Learning (CLIL)のコースも提供しているが、残念ながら CLIL のコースは 10 月開講ということで見学はできなかった。CLIL のコースは英語で授業を行わなければならない中等・高等教育教師のためのコースで、CLIL のコンセプトや授業の運営や指示などのための言語表現などに焦点をおいており、また、出版されている本や生教材などをどのように CLIL の授業に適応させていくかということを教えていくということである。

なお、もう一つの部門が English Language Teaching で、学生などを対象に英語や中国などを教える部門である。なお、日本との関係はどのようなものがあるかという質問に対して、Dr. Alvin Pang は、一つは JACET(大学英語教育学会)と関係があり、毎年お互いの年次大会に代表者を送ったり、送ってもらったりしているということであった。もう一つは中京大学をはじめとしたいくつかの日本の大学が RELC に学生を派遣しているということで、すでに 10 年以上前から中京大学のプログラムは続いているという。毎年、日本からの大学生は増えており、各大学に合わせてオーダーメイドで英語の研修を行ってくれるということで、短い 2 日ぐらいの研修を行っている大学もあるということである。今年度は日本の高校生も受け入れる予定であるという。これは私見ではあるが、イギリスやアメリカなどに行くよりも多少価格も安く抑えることができ、多少なまりのある英語で話しかけられるシンガポールは自身の日本語なまりの英語を恥じることなく、自信をもって使うことができるため、英語が苦手な学生にとってはいきなりイギリスやアメリカなどに行くよりもハードルが低くなるのではないかと感じた。将来的には本学の学生をシンガポールの学生と交流などができるように何か計画をたてていきたいと感じた。

なお、RELC は SEAMEO の管轄であると同時に、シンガポールの文部科学省の管轄でもあるので､RELC の所長である Dr.Alvin　Pang の上司は２名いるということであった。今回は Dr. Alvin Pang には本当にいろいろお世話になり、今後またシンガポールの研究を続けていくうえで、共同研究などをともに行っていけたらと考えている。

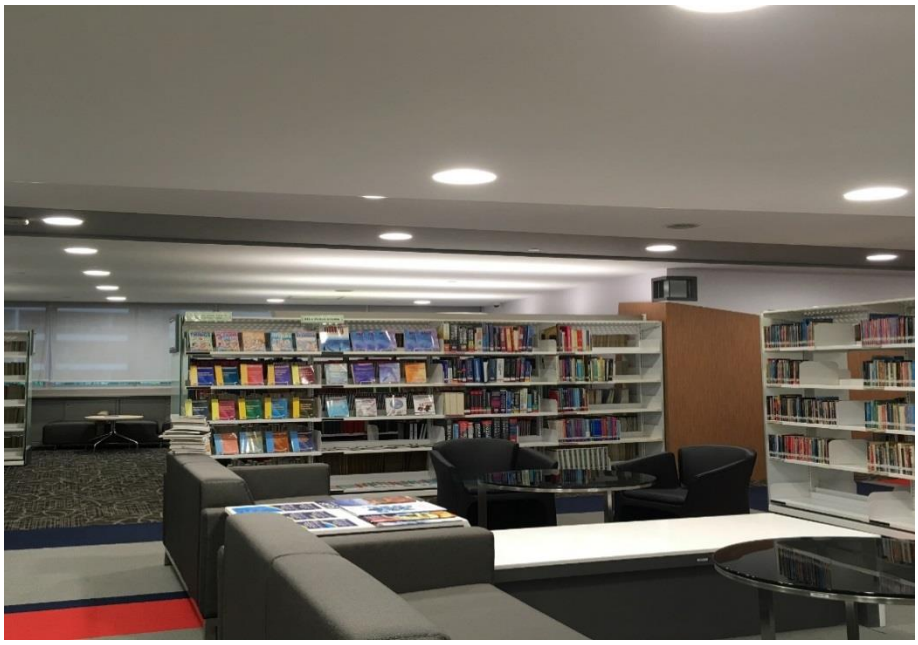
② 図書館において

RELC には図書館が付随しており、そこでは英語教育に関する図書・資料が閲覧できるようになっている。

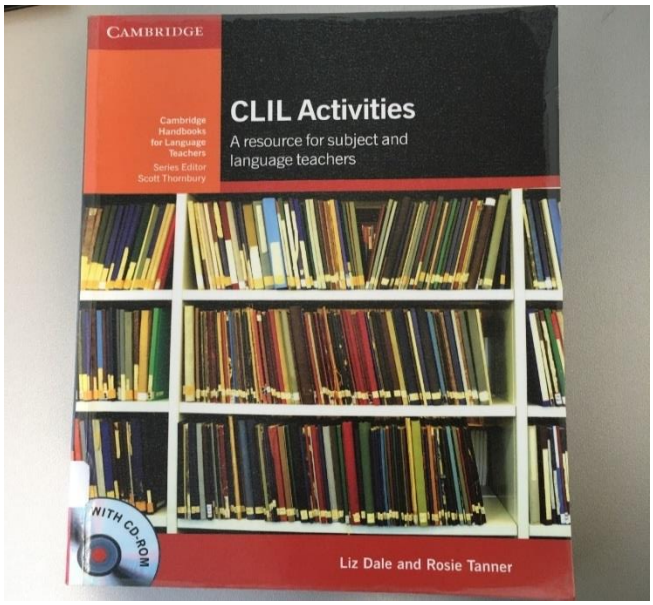
図書館において CLIL 関係の資料を調べた結果、以下のことが明らかになった。

CLIL を東南アジア諸国に適応しようとする試みは 2000 年から 2010 年にかけて British Council が中心になって推進しており、小学校での英語教育（Primary English Language Teaching: PELT）は CLIL 推進政策から派生した流れとなった経緯があることがわかった。British Council East Asia 主導の CLIL 推進策として,PIP(Primary Innovation Programme) Seminar が 2007 年にホーチミン市で，翌 2008 年にバンコクでそれぞれ開催されており，さらに、インドネシアでは 2008 年 British Council の関係者が CLIL 導入の地慣らしとして訪問し，シンポジウムや研修会を開催して，CLIL の情宣活動を行っている。さらに、東南アジアでは CLIL に関して異なる名称を使っている国もあり、この地域での CLIL は国によって名称が異なるので，それらの総称として English Bilingual Education（EBE）と呼ばれていることもある。

以下は RELC の図書館である



CLIL に関する書籍




タイにおける CLIL

東南アジアで CLIL の実践歴のもっとも長い国はタイであり、その実践は English Program（EP）と呼ばれ，主要科目のうち 5 教科を英語で教える形態で、より小規模にしたものとして，主要 3 教科を英語で教えるプログラムがあり，それは Mini English Program（MEP）と呼ばれる。これらの教育プログラムは小学校から高校レベルで実践されている。タイでの実践形態の特徴は，同一学校内でタイ語と英語のプログラムが平行して実施されるもの

で，生徒にはどちらかのプログラムを選択させる制度になっている。さらに、タイでは English Program の担当教員のほとんどを英語国からの native speaker 教師で賄おうとしているが，適格者を確保することには困難を極めており，そのため周辺の ESL 国，主としてフィリピンから教員免許保持者を採用している学校も少なくない。

マレーシア

マレーシアは独立前には多言語で教育が実施されていたが，その後，マレー系国民学校ではマレー語で，中国系とインド系学校では中国語とタミル語で，理工系科目は英語で，それぞれ教えるという機能の分担があった。1970 年代には，いわゆる Look East 政策を立ち上げ，国語であるマレー語（Bahasa Malaysia）を重視するマレー化を進めたために，英語を一教科として教える EFL 寄りに方向を転換したが，その後再度英語重視政策に転じ，英語を授業用言語として使用するようになった。

具体的には，2002 年，数学と理科について授業用言語を英語に切り換えた。英語重視政策に転換した理由として，それまでの 30 年間，マレー語重視，英語軽視の教育により国民の英語力が低下したことと教材のマレー語翻訳が需要に追いつかなかったことがあった。この決定には賛否両論が闘わされ，全国民の注目を引いた。しかし，その後理工系科目の成績が芳しくないとの理由で，再びマレー語に戻すべきとの意見が強くなり，現在論争が続いている。文部省は理工系科目の授業用言語をマレー語に戻すとの案を 2009 年に発表し，2012 年から実施している。このことは，過去 40 年間の民族統合は失敗したという意味であり，今後民族分離の兆候が見て取れる。たとえば，MARA Science School や Universiti Teknologi Mara はほぼマレー系学生だけになっている。このように，マレーシアの英語教育は ESL 的施策と EFL 的施策の間で揺らいでいる。現在は EFL 寄りに戻りかけており，英語 CLIL を採用しようとしている段階である。ヨーロッパ諸国以上に英語のインフラが整備されているマレーシアでは，英語運用力を有する理数系科目の担当教員の確保は比較的容易であり，英語 CLIL の実施には大きな支障はないであろう。この点が東南アジアの EFL 国と大きく異なる。

③ Andalas University の Wulan Fauzanna 専任講師へのインタビュー

RELC の研修に参加していた Andalas University の Wulan Fauzanna 専任講師にインタビューをすることができた。インドネシアでは小学１年生からの小学校での英語教育が１０数年前から行われていたが、数年前に中止になった。理由としては児童のインドネシア人としてのアイデンティティが失われていくというのが大きな理由であるという。

また、CLIL においても数年前に３年間ぐらい公立の中学校・高等学校で行っていた。すべての中学校・高等学校ではなく、一部の中学校・高等学校であり、しかもすべてのクラスではなく、特別クラスとして設置され、CLIL のクラスに入りたい生徒は授業料を特別に払う必要があるということで、CLIL のクラスに入れるのは裕福な家庭の生徒が多かったと

いうことである。

CLIL の授業は英語のネイティブではなく、各教科の教師が行っていたため、研修などは行っているが、英語がかなりレベルの低いもので、あまり成功したとはいえないといわれているとも話していた。CLIL においても小学校での英語教育が中心になった同時期に中止になり、中止になった理由も小学校英語教育が中止になった理由と同様に生徒のインドネシア人としてのアイデンティティが失われるということが一番の理由であったという。

現在は大学レベルにおいて CLIL が行われているということで、インタビューを行った Wulan Fauzanna 先生も CLIL の統括などに関わっているということであった。大学においても CLIL のコースなどを取りたい場合は、特別な授業料をさらに支払う必要があり、CLIL を提供している教室などの施設は豪華でカーペットや机、椅子などが通常のコースなどとはかなり異なるということで、CLIL はインドネシアでは裕福な学生のための特別なコースであるという。

インドネシアの Andalas University の Wulan Fauzanna 先生　日本に２年間滞在していたことがあり、日本の大学でも英語を教えていたこともあるという

実はインドネシアに関する CLIL に関しては日本においていくつかの文献で調べていったのだが、インドネシアでは中学校において CLIL を English　Medium Math and Science (EMMS) と称し，英語で教える教科を数学と理科に絞り、対象中学校のすべての生徒を対象に実施していると書かれていたが、今回のインタビューの内容と異なるものであり、かなり驚い

た。なお、Wulan Fauzanna 先生とはメールアドレスなども交換し、今後インドネシアに関する研究を行う場合は喜んでお手伝いしますので、ぜひ Andalas University に来てくださいということで東南アジアにおける人的ネットワークを築き上げることができたと思われる。

## 2.国立図書館での活動

資料を収集するため、National Library(国立図書館)を訪問した。資料室に入るたびにカバンをあけて中をごそごそと毎回調べられ、さらに、不便であったのは、資料のコピーなどが禁止されているため、見たい資料がある場合はそれを書き写すため何度も訪問しなければならかった。著作権という観点からだと思われるが、さすが法律・規則に厳しいシンガポールであることを実感した。何回か通いながらシンガポールの英語教育や小学校の教育についての資料を収集した。

一方、National Library の地下にある Central Public Library は子供図書館が充実しているということで訪問してみたが、非常にかわいい作りになっており、英語と中国語の絵本がたくさん所蔵されていた。また、英語や中国語の読み聞かせを定期的に行っているようである。

National Library(国立図書館)の外観

Central Public Library の子供図書館の入り口

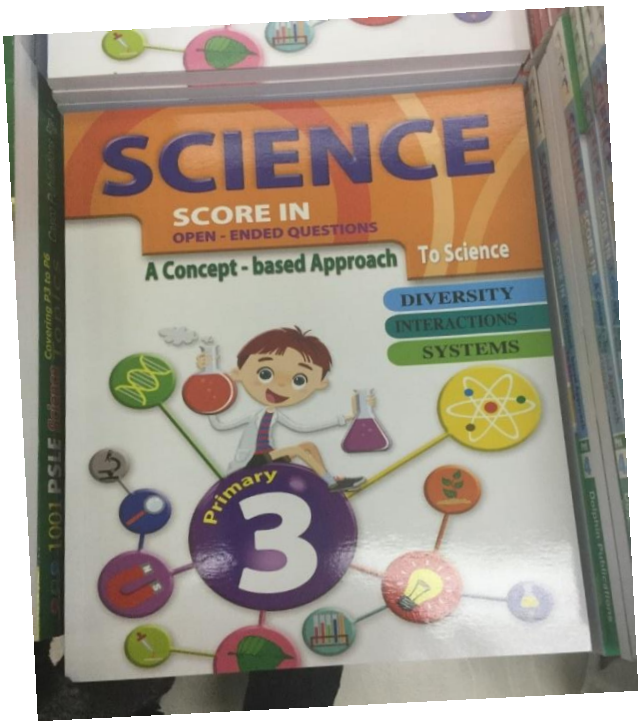
子供図書館の内部の様子

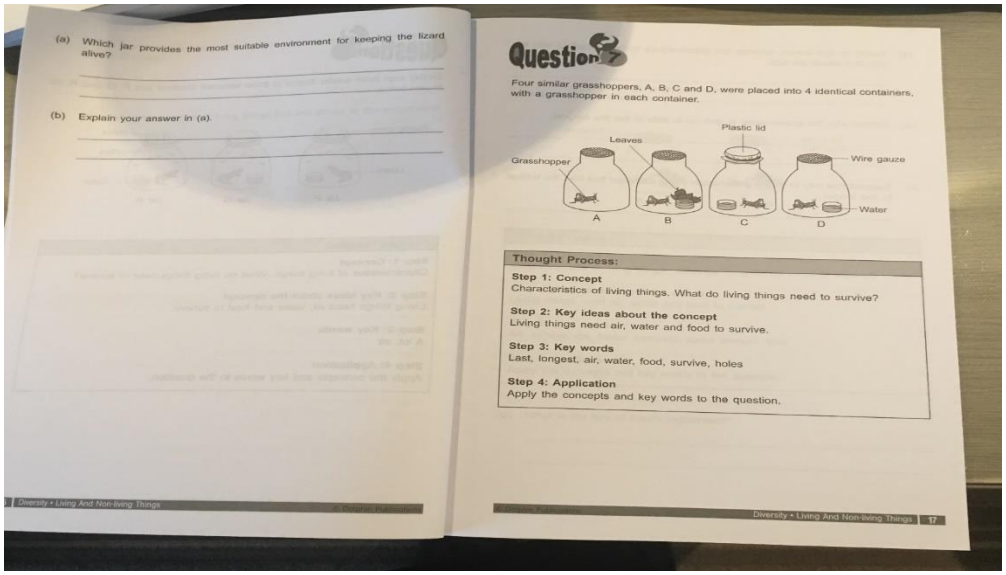
3. 教科書収集ため本屋を訪問

シンガポールでは小学校から授業はすべて英語で行われているため、シンガポールの他教科の教科書は CLIL の参考になるだろうと考え、シンガポールの教科書を収集するため、いくつかの本屋を訪ねた。非常に驚いたのは、イギリスやアメリカなどの小学生を対象にした他教科の教科書よりも英語が非常に簡単でわかりやすいということである。シンガポール人にとっては英語は母語ではなく、あくまでも第二言語・学習言語であるため、この

ようにわかりやすく書かれているのであると思われるが、日本の児童を対象にした CLIL の教材を作成するのに非常に参考になると感じた。CLIL を実施するうえで最も難しい課題の一つが教材作成であるが、
英語が母語ではなく、教科を学習するための言語であるシンガポールの教科書は日本が今後様々な観点から参考になるのではないかと感じた。実は教科書に関してはあまり期待していなかったのであるが、今回の訪問で最も収穫といえるものになった。上述したようにインドネシアの CLIL に関して、日本の CLIL 研究の一人者という方が書かれている書籍の内容と今回のインタビューの内容がかなり異なるもので、現地語をわからない場合の難しさをあらためて感じた。おそらく、現地の研究者の話を聞きながら、または英語の資料などを読みながらまとめられたと思うのだが、現地の研究者においても本当にそれを専門にする専門家でないかぎりかなり間違ったことを話すことが多い。よって、今回のインドネシアの CLIL に関しても実際どちらの意見が正しいか、現地語の文部科学省の資料にあたらないかぎり、あるいはその担当者に聞かない限りわからないであろう。今までは韓国を中心に研究を行っており、韓国語がわかるため、他の研究者の間違い（教科書分析と論文発表していたが、実際はただの市販の参考書分析であった）などいろいろわかることができたが、このままインドネシアなどの東南アジア全般の CLIL を研究するとなると現地語がわからないため、自分も同じような大きな間違いを起こすことを実感した。そのような中で、シンガポールの教科書が予想外に簡単な英語で書かれており、今後日本の CLIL 教材作成に大きく参考になることがわかったため、よって今後は研究対象を東南アジア全体からシンガポールの小学校における他教科の教科書により焦点を当てた研究を行っていこうと考えている。

3 年生の科学の教科書



(a) Which jar provides the most suitable environment for keeping the lizard alive?

(b) Explain your answer in (a).

Question

Four similar grasshoppers, A, B, C and D, were placed into 4 identical containers, with a grasshopper in each container.



Thought Process:

**Step 1: Concept**
Characteristics of living things. What do living things need to survive?

**Step 2: Key ideas about the concept**
Living things need air, water and food to survive.

**Step 3: Key words**
Last, longest, air, water, food, survive, holes

**Step 4: Application**
Apply the concepts and key words to the question.

Diversity • Living And Non-living Things 17

4.カトンの図書館　Marine Parade Community Library

後半の 5 日間は空港に近いカトンに移った。中央の図書館では、カバンの中を部屋に出入りするたびに調べられ、コピーはだめだとかいろいろ厳しく、担当の人も不親切で、何を聞いてもわかりにくい英語で説明され、本当に居心地が悪かった。

それに比べ、カトンの図書館はとても親切で、Marine Parade Community Library にはコピー機はないが、国立図書館にはあるということを教えてくれた。国立図書館の担当者は

ないと回答していたと話したら、国立図書館のコピー機の場所ややり方などまでも教えてくれた。また、図書館の制度を詳しく教えてくれ、今は eReads というシステムがあり、こちらにアクセスして、電子ブックや資料などが見れるようになっているということで、会員になるとダウンロードすることもできるということであった。外国人も可能であるが、1 回アクセスするのに、1000 円近く支払う必要があるが、どういった書籍や資料があるかだけは無料の ID とパスワードを取得すれば見ることができることで、一緒に ID とパスワード取得を親切に手伝ってくれ、アクセスして調べることができた。なお。シンガポール人は無料でアクセスし、21 日間電子ブックを借りれるということである。

Marine Parade Community Library の入口

5. カトンの幼稚園・小学校訪問

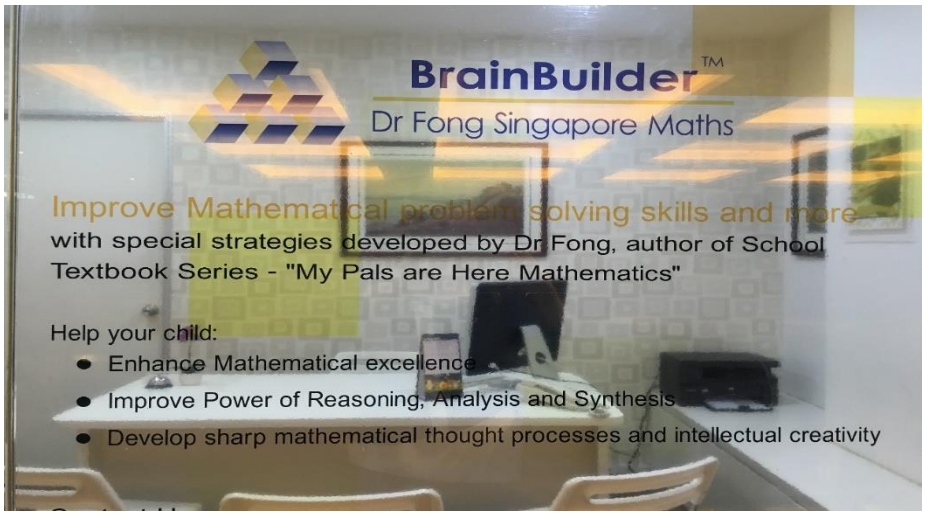
カトンの町に幼稚園・小学校があったので、訪問してみた。お城のような建物で、こちらは私立の幼稚園であるという。びっくりするぐらい綺麗な施設であった。外部からの写真は許可するが、内部での写真は一切許可できないということで、写真は外部からのしかないが、話は聞くことができた。かなり英語教育に力を入れているようで、何度も優秀校として表彰されているようである。

Odyssey The Global Preschool

CHIJ Primary School

こちらも私立の女子小学校で、日本人研究者が一人で訪問しても話を聞くだけが限界であった。今後は現地の研究協力者を通してこのような場所を訪問するなら、授業見学・調査なども可能になるのではないかと思われる。

その他、歩いていると塾がそこらへんにあり、１つのショッピングセンターには３つか４つの塾が入っているようであった。　次回訪問するときには、もう少しゆっくりシンガポールの教育制度について調査を行ってみたいと思った。




Brain Builder という算数専門の塾

まとめ

ほぼメインで計画した RELC での活動の目的は達することができたが、一方で、現地語ができないがゆえの東南アジアにおける研究の難しさを実感した。しかし、シンガポールの他教科の教材のすばらしさを発見することができ、今後の研究の方向性として、東南アジア全般の CLIL の研究からシンガポールに的を絞った小学校における他教科の研究を行い、日本の CLIL の発展に貢献していきたいと行く前とは少し研究方針が変わった。これも現地で 20 日以上滞在したからこそわかったことだと思う。さらに、中央の役所の厳しさを実感させられ、おそらく地方のほうが現地の人に溶け込んで研究をよりスムーズに行うことができるのではないかということがわかった。最後に滞在したカトンはあまり大きな期待もしていなかったのだが、思いのほか、eReads など貴重な情報を得ることができ、今後のシンガポールに関する研究を進めるうえでこの eReads はかなり役に立つのではないかと思われる。あのまま中央でのみ研究を続けていたら、得られない情報であった。また、今回は先生への簡単なインタビューだけで内部の写真や授業観察などは無理であったが、カトンのホテルの周りを歩けば図書館・幼稚園・小学校・公民館・塾など庶民の生活があるが、中央ではショッピングセンターや会社ばかりでそのようなものはほとんど目に入らなかったので、シンガポールの教育の研究を行うには中央よりも少し外れたカトンのような場所で行うほうがいいのではないかということも実感した。今回の滞在で足をつかってのフィールドワークのすばらしさを実感でき、今後、シンガポールにおける研究計画を立てるうえで、今回の経験が大きく役に立つと思われる。また、RELC においては Dr Alvin Pang をはじめ、東南アジアの英語教員や大学教員に会うことができ、今後のシンガポールにおける人的ネットワークの基盤を築き上げることができたと思う。

非常に有意義な研究活動をできました。このような研究機会を与えてくださった国際交流基金に心から感謝申し上げます。